

障害者に寄り添い 彼らの新たな魅力を引き出す「学び」の場

Profile

大森 梓 (おおもり あずさ) さん

NPO法人障がい児・者の学びを保障する会代表理事。知的障害のある子を含む4児の母。育児を通して障害者の様々な社会的課題に直面し、活動を始める。任意団体「ままのがっこ」を立ち上げ、その後、教員OG/OBらと同法人を設立。生きること自体が学びであると捉え、障害当事者を中心にした固定概念に捉われない様々な学びの場をつくる活動を目指す。主な活動は、障害福祉サービス（生活訓練）事業の学びの場『MoreTimeねりま』、練馬区地域おこしプロジェクト発自主事業『i-LDK』等



MoreTimeねりまの活動内容

NPO法人障がい児・者の学びを保障する会の活動の1つ。障害者総合支援法により「自立訓練（生活訓練）」と位置付けられる、障害のある人たちの地域生活移行支援を目的とした障害福祉サービス事業を活用した「学び」の場として実施している。



- 【設立】2019年4月
- 【所在地】東京都練馬区高松 2-15-18
- 【対象】特別支援学校高等部・高校を卒業した者、
または、就労の継続に困難を抱えている知的障害のある青年。
- 【定員】20名 ※年度ごとに10名程度の予定。
- 【利用期間】2年間
- 【利用時間】平日 9:30 ~ 16:00
- 【利用料】実費のみ（行事費等で月5,000円程度）
- 【ホームページ】<https://npo-manabinokai.com/>



活動の様子

「学び」の場をつくるきっかけ

「NPO法人障がい児・者の学びを保障する会」を立ち上げるきっかけとなったのは、知的障害のある私の息子の存在でした。息子に合った学びの機会や選択肢が少ないことに違和感を抱き、知的障害のある子を持つ保護者の方たちと進路学習会を実施したり、息子の卒業を機に特別支援学級の同窓会を立ち上げ、卒業後もかわり合える場をつくる中で、私と同じ考えを持つ方が多いことを知りました。そこで、学校卒業後も障害のある人自身が必要なことを学び続けられる場所をつくらうと考え、2017年に同法人を立ち上げました。

私は、ここで障害のある人たちが主体的に生き、学び合えるよう、健常者と障害者の立場を超えて寄り添いながら、安心して活動できる場を提供できるように努めています。

MoreTimeねりまについて

「More Time ねりま」では、「生きる」「はたらく・くらす」「文化・教養」「スポーツ」などの基礎知識や運動の機会、「自主活動」「部活」などの1人ひとりが主体的に考え、試行・探求する機会など、幅広く学ぶことができる場を提供しています。現在、16名の学生がいます。学生全体の約1/3は、高校や特別支援学校高等部を卒業してすぐ進学された方で、あとの約2/3は、就労中に人間関係に悩んで離職し、ひきこもりになってしまった方や、自分に合う場所がなく福祉施設を転々としていたり、病院に入院をしていた方などいます。学生の多くは、これまでの経験から自分や他者を信頼する力を失くしてしまい、自分をうまく表現できずにいることもありましたが、安心できる場所で仲間とともに時間を過ごす中で、自分の感覚を取り戻し、自信をもって意見を伝えられるようになり、いきいきと活動できるようになっています。

新たな社会参加に向けた一歩が 社会にもたらした学び

私たちの法人は現在、地域活動にも積極的に参加しています。2018年に、練馬区とのタイアップで、選挙権の年齢引下げが施行され、投票率を上げるために一緒に活動をしたことがきっかけです。翌2019年にはさらに選挙を自分たちの暮らしにつなげていくため、区議会議員6名とのディスカッションを企画しました。2020年には、私が区の障害者計画懇談会の委員になったことを機に、障害のある当事者たちの想いを届けるために、「勝手に検討会」という会議を私たち独自に開いて、話し合っただけで意見を懇談会の場で届けました。それと並行して、知的障害のある当事者は、「障害者」と名のつく多くの委員会に参加できていなかったため、当事者の参加を区の担当者に提案しました。この提案が反映されて、2021年の「(仮称) 障害者の意思疎通条例検討部会」で、初めて知的障害のある当事者が委員として参加することになりました。これだけでも画期的なことなのですが、さらに多くの人たちに彼らの意見が広く伝わるよう、彼らが委員会に参加した後のインタビュー動画を作成し、その様子をネット上で発信しました。彼らが委員として参加した感想などを発信すれば、既存の委員会の在り方を変えていくきっかけになるのではないかと思います。

彼らが委員会に参加したことは、新たな社会参加のカタチであり、今後につながる大きな1歩になったと思います。彼らが自分自身で考え、新たな問いを生み出し、さらに考え続けながら活動すること、つまりこれこそが「学び」であり、こうした「学び」の場は彼らだけでなく、社会にも変化=学びをもたらすこととなります。こうした相互的に学び合えるということが、とても大切なことだと思います。

学生との交流で学んだことは

学生との交流を通じて、日頃から私自身が多くのことを学んでいます。中でも印象的なエピソードが一つあります。勉強よりも体力重視の学校で生活を送っていた学生がいて、彼は就職後、漢字が読めないことで職場の人から理不尽な目にあっていました。「怒られないようにするにはどうしたらいいか」を考え、家にあった漢字辞書を使い、漢字の読み書きができるようになるまで、ひたすら読み込んだそうです。私には、5年以上もの時間をかけて漢字辞書を読み込むという方法は、とても思いつかないのですが、学校でも社会でも漢字を学習する機会がなかったため、やむなく彼が自力で編み出した方法です。理不尽な状況はもちろん改善していかなくてはなりません。私は彼のように何かを習得するために、自分で考えて判断し、行動することこそが「学び」の原点だと思いました。このような彼ら自身がこれまで生きてきた中で身に付けてきた術は、まさに「学びのたまもの」と言える大変貴重なものであり、これから私たちが学ぶべきことが多くあるのではないかと感じています。

今後の展望は

「学び」の場で発掘された学生らの得意なことや好きなこと、彼らにしかできないことが活かせる場所をつくり出せないかと考えています。彼らの得意なことが人の役に立ったり、地域社会が求めているなんらかの役割を果たすような、たとえば仕事などに活かすことができれば、とても素敵なことだと思います。「学ぶこと」は新しい働き方や仕事の在り方を広げ、また、人生を豊かにする新たな可能性であることを彼らとともに証明していきたいと思っています。

ちなみに、下の図は「学び」の場の学生たちが作成しましたので、ぜひご覧ください。取組の詳細はURLでご確認いただけます。応援、どうぞよろしくお願いいたします。

